



初年次教育科目「初年次ゼミナール」の目的と到達
目標の達成状況を検証する：
2022年度受講者アンケートの結果から（資料論文）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学 高等教育研究開発センター 公開日: 2024-04-26 キーワード (Ja): 初年次教育, 初年次ゼミナール, 多様な視点, 到達目標, キャンパスによる差異 キーワード (En): first-year education, First-Year Seminar, diverse perspectives, achievement goals, differences by campus 作成者: 橋本, 智也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000685

■ 資料論文

初年次教育科目「初年次ゼミナール」の目的と到達目標の達成状況を検証する：2022年度受講者アンケートの結果から

Evaluating the objectives and achievement goals of the first-year education course 'First-Year Seminar':
Insights from a 2022 survey of course enrollees

橋本智也
高等教育研究開発センター

HASHIMOTO Tomoya
Center for Research and Development in Higher Education

キーワード：初年次教育、初年次ゼミナール、多様な視点、到達目標、キャンパスによる差異
Key Words: first-year education, First-Year Seminar, diverse perspectives, achievement goals, differences by campus

抄録

本研究は大阪公立大学の初年次教育科目「初年次ゼミナール」について、目的と到達目標の達成状況を検証した。その結果、全学的な観点とキャンパス別の観点の両面で達成状況が良好であることが確認された。また、初年次ゼミナールで学ぶ学生の学習環境も検証した。その結果、多くの学生は担当教員からの指導や助言、学生同士の議論や学びあい、授業時間外の自習をいずれも有効と考えていた。初年次ゼミナールの重要な目的のひとつである「多様な視点への気づき」の達成について、「学生同士の議論や学びあい」と「履修学生の学部・学域の多様性」それぞれとの関連性を検証した。その結果、前者との関連性は示唆されたが、後者との明確な関連性は確認されなかった。初年次ゼミナールの特色である履修学生の学部・学域の多様性が実現するよう大学として取り組みつつも、個々の授業で学生が多様な視点に気づくことを促す学習環境を整えることが重要になると思われる。

1. 研究の背景と目的

1.1. 研究の背景

大阪市立大学と大阪府立大学が統合し、2022年4月に大阪公立大学が開学した。大阪市立大学は8学部10研究科、大阪府立大学は4学域7研究科と、ともに幅広い学問分野にわたる総合大学であり、大学統合によって大阪公立大学は12学部・学域15研究科という、より幅広い学問分野を持つ総合大学となった。大阪公立大学の学生は自身の専攻する学問分野を深めるだけではなく、幅広い学問分野の学生とともに学ぶことができる環境にある。

そのような幅広い学問分野の枠を超えて学び合う機会のひとつとして、大阪市立大学、大阪府立大学ともに初年次教育科目が提供されてきた。大阪市立大学で

は「初年次セミナー」（1年前期・選択科目）、大阪府立大学では「初年次ゼミナール」（1年前期・必修科目）という授業科目名で開講され、少人数のゼミナール形式で授業が行われてきた。大阪公立大学では「初年次ゼミナール」という授業科目名で、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスで開講されることとなった。杉本キャンパスは大阪市立大学で初年次教育科目が開講されていたキャンパスであり、中百舌鳥キャンパスは大阪府立大学で初年次教育科目が開講されていたキャンパスである。大学統合により学部・学域の構成がさらに幅広くなったことで、初年次教育科目の授業に参加する学生の学部・学域もさらに多様になったことになる。なお、同授業科目を直接運営するのは学内組織の国際基幹教育機構¹の初年次教育科目委員会である。

大阪公立大学の初年次ゼミナールは、1年前期の必修科目であり、大阪市立大学、大阪府立大学と同様、少人数（原則として15～17人）のゼミナール形式での授業である。特定の部局の教員ではなく、全学の教員が授業を担当し、約200クラスが開講される。全学の教員が授業を担当することにより、大阪公立大学の学生は大阪市立大学、大阪府立大学の初年次教育科目よりも多様な学問分野の教員から学ぶことが可能になったと言える。

履修の仕方に関して、大阪公立大学の初年次ゼミナールは学部・学域による履修制限はなく、学生は関心のあるテーマを選んで履修する（クラス定員を均一にするための抽選は行われる）。授業のテーマは担当教員の専門分野等から個々に設定されるが、授業の目的は知識の習得自体ではない。以下のシラバスの「授業概要」（全クラス共通で設定される）に示されるように、多様な視点の存在に気づきながら、受動的な学びから能動的な学びに移行することが目的として設定されている。

授業概要：

全学部・学域混成の少人数編成による必修ゼミナール。入学前の受動的になりがちな学びから、学生自らが動き、働きかける大学での能動的な学びの姿勢を身に付けることを目的とする。様々な専門分野の教員が設定した特定のテーマについてグループ研究を行う中で、異なる価値観や多様性に接しながら、研究に必要な基礎的・基本的な知識と技法を学ぶ。

また、上述の通り、初年次ゼミナールは多様なテーマで約200クラスが開講されるが、以下のシラバスの「到達目標」に示される通り、全クラス共通の到達目標が設定されている。

到達目標：

1. 図書館、各種データベース等を活用して、必要な資料や情報を収集できる
2. 収集した情報や他者の意見を取り入れ、論理的に考えることができる
3. 適切な形式でレポート作成、発表等ができる

大阪市立大学の「初年次ゼミナール」は、前身の授業科目「1回生ゼミナール」（2004年度開設）において、既に「専門を超えて他学部の教員や学生と一緒に学ぶことによって広い視野と総合的に考える力を養い、総合大学で学ぶことの意義を自ら確認させること」が重視されていた（大阪市立大学大学教育研究センター、2004）。大阪府立大学の「初年次ゼミナール」においても、教育目標のひとつに「多様な視点を積極的に取り入れ、活用できるようにする」が設定されていた（高橋、2018）。大学統合により、大阪市立大学、大阪府立大学よりも幅広い学部・学域の学生がともに初年次教育科目で学び、幅広い専門分野の教員が初年次教育科目を担当するという環境になり、多様な視点への気づきは、より重要性が高まったと言える。

そのような背景がある中、大阪公立大学の学生が初年次ゼミナールの目的（学生が受動的な学びから能動的な学びに移行すること、多様な視点の存在に気づくこと）と到達目標を実際に達成できたか、学生がどのような学習環境の下、初年次ゼミナールで学んでいたかについては、大阪公立大学の初年次教育科目委員会において履修学生を対象としたアンケート調査「2022年度初年次ゼミナール受講者アンケート」（以下、「アンケート調査」；詳細は後述）の結果が報告されている。同委員会の報告では時間的な制約もあり、結果を確認する方法として、多くの設問において単純集計とキャンパスを区別しない全学的な集計が主に用いられ、より詳しい分析は紀要等での報告に委ねられた²。単純集計だけでなく統計処理も用いた、より詳しい分析を行うことによって、学生の学習成果の状況をより高い精度で把握することが可能になり、初年次ゼミナールの目的と到達目標のこれまで以上の達成に向けて有用な情報を得ることができる。また、キャンパスを区別した検証により、キャンパス間で到達目標の達成状況に大きな乖離がないか等を点検することができる。

また、アンケート調査の結果は、「大阪公立大学の初年次ゼミナールについての説明会」（2022年12月26日オンライン開催）においても報告されている。ただし、その対象者は翌年度（2023年度）の授業担当教員であった。初年次ゼミナールは、特定の部局ではなく、全学の教員が担当する科目であることから、本稿を通

して全ての教員がアンケート調査の結果の詳細にアクセス可能になることには意義がある。

1.2. 研究の目的

そこで本研究では、まず、新しい体制となった初年次教育科目の学習成果を検証するため、履修学生が「初年次ゼミナールの目的と到達目標の達成状況」をどのように自己評価していたのかを明らかにする。次いで、初年次ゼミナールで学んでいた学生がどのような学習環境にあったのかを検証するため、履修学生が「到達目標の達成に向けた指導・助言や学習行動の有効性」、「履修学生の学部・学域の多様性」、「施設や学修支援の有効活用」をどのように捉えていたのかを明らかにする。最後に、初年次ゼミナールの重要な目的のひとつである「多様な視点への気づき」のさらなる達成に向けて、多様な視点への気づきに関係する要因が何であるかを明らかにする。

また、検証の観点として、全学的な状況を把握するためにキャンパスを区別しない分析を行うとともに、キャンパス間で到達目標の達成状況に大きな乖離がないか等を点検するためにキャンパスを区別した分析を行う。

2. 方法

初年次ゼミナールの履修学生を対象としたアンケート調査「2022年度初年次ゼミナール受講者アンケート」のデータを利用した。アンケート調査は国際基幹教育機構が実施した。対象者は2022年度に「初年次ゼミナール」を履修した全学生2,912名であった。無記名式で行われ、履修学生の所属学部・学域も尋ねていない。設問の構成は、以下の通りであった。

- ・ 履修した初年次ゼミナールの開講キャンパスに関する設問（設問1；選択肢式）
- ・ 初年次ゼミナールの目的や到達目標の達成度に関する設問（設問2（1）～（6）；選択肢式）
- ・ 学内施設・学修支援の活用等に関する設問（設問3（1）～（3）、設問5；選択肢式）
- ・ 履修した初年次ゼミナールの人数と履修学生の所属学部・学域の構成に関する設問（設問4（1）、

（2）；選択肢式）

- ・ 履修した初年次ゼミナールについての感想や意見等に関する設問（設問6、設問7；自由記述式）

本研究では、選択肢式の設問（設問1～5）を分析対象とした。紙幅の関係で、各設問の具体的な文言は以降の「3. 結果」に記載する（設問の一覧は別紙を参照）。

アンケート調査は2022年度前期の授業・試験期間（2022年8月4日まで）の終了後、Microsoft Formsで実施された。回答期間は2022年8月8日から2022年8月31日までであった。回答期間中、履修学生にリマインダーが2回配信された。

以降の検証において、統計的手法も用いながら（使用ソフト：IBM SPSS Statistics version 29.0.1.0）、全学的な観点からキャンパスを区別しない検証と、キャンパス間での乖離の点検等の観点からキャンパスを区別した検証を行った。

3. 結果

アンケート調査の回答率は33.7%（対象者2,912名中、回答者981名）であった。履修した初年次ゼミナールの開講キャンパスは杉本キャンパスが518名、中百舌鳥キャンパスが463名であった。以下、「初年次ゼミナールの目的と到達目標の達成状況」、「到達目標の達成に向けた指導・助言や学習行動の有効性」、「履修学生の学部・学域の多様性」、「施設や学修支援の有効活用」、「『多様な視点への気づき』に関係する要因」の順で分析結果を述べる。最後の「『多様な視点への気づき』に関係する要因」はキャンパスを区別した検証のみ行い、他は全学的な観点からの検証とキャンパスを区別した検証の両方を行った。

3.1. 初年次ゼミナールの目的と到達目標の達成状況

「初年次ゼミナールの目的と到達目標の達成状況」の分析に使用した設問を以下に示す。

2. 初年次ゼミナールの受講を通じて、次の到達目標がどの程度できるようになったと思いますか。それぞれ当てはまる数値を1つ選んでください。

- (1) 他の受講生等の多様な視点を積極的に取り入れて、自身の学びや思索に生かすこと

- (2) 知識や情報の収集を、必要に応じて図書館や各種データベース等を活用して、積極的に行うこと
 - (3) 収集した知識・情報を活用して、論理的に考えること
 - (4) 入手した情報やそれに関する自分の考えを表現・発表できること
 - (5) 自分の考えを自分で再検討できること
 - (6) 適切な形式でレポート作成、発表等ができること
- 選択肢：4. できるようになった、3. ある程度できるようになった、2. あまりできるようにならなかった、1. できるようにならなかった

て「できるようになった」「ある程度できるようになった」の合計が90%前後であることから、初年次ゼミナールを履修した学生の多くは、目的と到達目標の達成状況をポジティブに自己評価していることがわかる。

3.1.2. キャンパスを区別した検証

上記の各設問について、選択肢に4から1の数字（「できるようになった」が4、「できるようにならなかった」が1）を割り当てた上で平均値を算出し、対応のないt検定でキャンパスによる差異を検証した。その結果を表1に示す。キャンパスの区別には、以下の設問を使用した（以降も同様）。

3.1.1. 全学的な観点からの検証

上記の各設問における選択肢の分布を図1に示す。図1の通り、学生・教員の多様性という初年次ゼミナールの特色に対応した設問である「(1) 他の受講生等の多様な視点を積極的に取り入れて、自身の学びや思索に生かすこと」を含め、(1)～(6)の全てにおい

1. どちらのキャンパスで開講された初年次ゼミナールを受講しましたか
 選択肢：中百舌鳥、杉本

表1の通り、6つの設問の全てにおいて、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの間には5%水準で有意

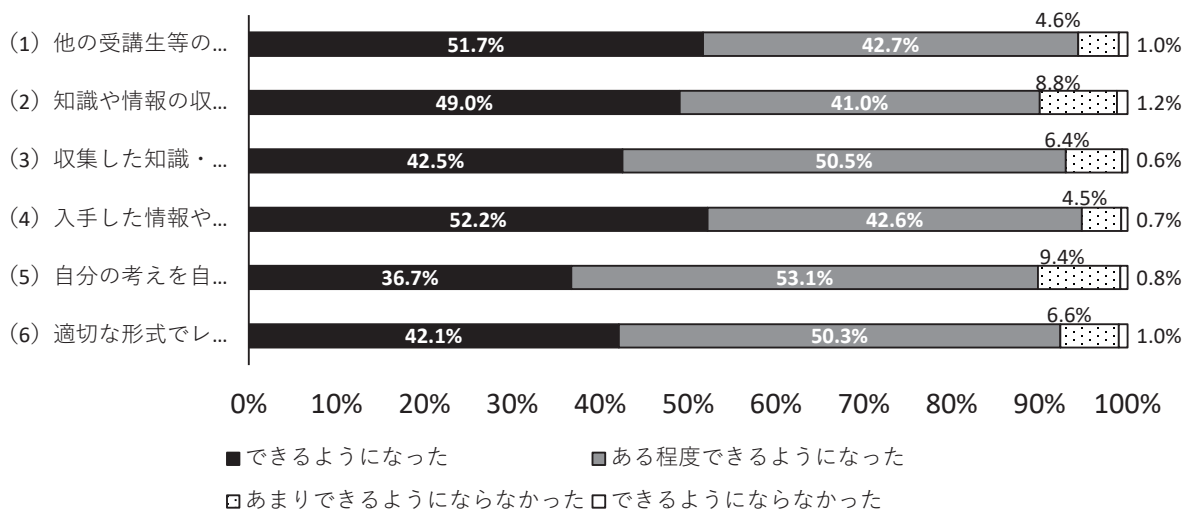


図1：初年次ゼミナールの目的と到達目標の達成状況<杉本+中百舌鳥>

表1：初年次ゼミナールの目的と到達目標の達成状況<キャンパスの差異検証>

設問	M		SD		t	p	Cohen's d	95%CI
	杉本	中百舌鳥	杉本	中百舌鳥				
(1) 他の受講生等の...	3.43	3.47	0.67	0.59	-0.85	.394	-0.05	[-1.295, 1.187]
(2) 知識や情報の取...	3.36	3.40	0.72	0.67	-1.10	.273	-0.07	[-1.434, 1.294]
(3) 収集した知識・...	3.31	3.39	0.65	0.60	-1.91	.057	-0.12	[-1.348, 1.105]
(4) 入手した情報や...	3.45	3.48	0.64	0.59	-0.70	.485	-0.05	[-1.255, 1.166]
(5) 自分の考えを自...	3.27	3.24	0.69	0.62	0.58	.560	0.04	[-1.245, 1.320]
(6) 適切な形式でレ...	3.33	3.34	0.66	0.63	-0.42	.677	-0.03	[-1.292, 1.239]

差は見られなかった。各設問の効果量 (Cohen's *d*) については、最小で-0.03、最大で-0.12 (絶対値で評価) であり、小さい値であった (設問 (5) のみ正の値、他の5つの設問は負の値)。このことから、キャンパス間で差があったとしても、その差は実質的にはとても小さいと解釈できる。95%信頼区間についても、全ての設問で0を含んでいた。したがって、初年次ゼミナールの目的と到達目標の達成状況は杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの間で統計的に有意差はなく、実質的にも大きな差はないと言える。

3.2. 到達目標の達成に向けた指導・助言や学習行動の有効性

「到達目標の達成に向けた指導・助言や学習行動の有効性」の分析に使用した設問を以下に示す。

3. 問2の6つの到達目標を学んでいく上で、次の点はどの程度有効でしたか。それぞれ当てはまる数値を1つ選んでください。

(1) 担当教員からの指導や助言
 (2) 学生同士の議論や学びあい
 (3) 授業時間外の自習 (レポートやプレゼンの作成、作成のための情報収集などを含む)

選択肢：4. 有効だった、3. どちらかといえば有効だった、2. どちらかといえば有効ではなかった、1. 有効ではなかった

3.2.1. 全学的な観点からの検証

上記の各設問における選択肢の分布を図2に示す。図2の通り、(1)～(3)の全てにおいて「有効だった」「ある程度有効だった」の合計が90%前後であることから、初年次ゼミナールを履修した学生の多くは、到達目標の達成に向けた指導・助言や学習行動の有効性をポジティブに評価していることがわかる。

3.2.2. キャンパスを区別した検証

上記の各設問について、選択肢に4から1の数字 (「有効だった」が4、「有効ではなかった」が1) を割り当てた上で平均値を算出し、対応のないt検定でキャンパスによる差異を検証した。その結果を表2に示す。

表2の通り、設問 (1) 「担当教員からの指導や助言」と設問 (2) 「学生同士の議論や学びあい」においては、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの間には5%水準で有意差は見られなかった。効果量も設問 (1) で-0.11、設問 (2) で-0.07と小さく、95%信頼区間も0を含んでいた。

一方で、設問 (3) 「授業時間外の自習」においては、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの間に5%水準で有意差が見られた。95%信頼区間は0を含んでいなかったが (上限と下限がともに負の値であり、中百舌鳥キャンパスの平均値の方が杉本キャンパスの平均値

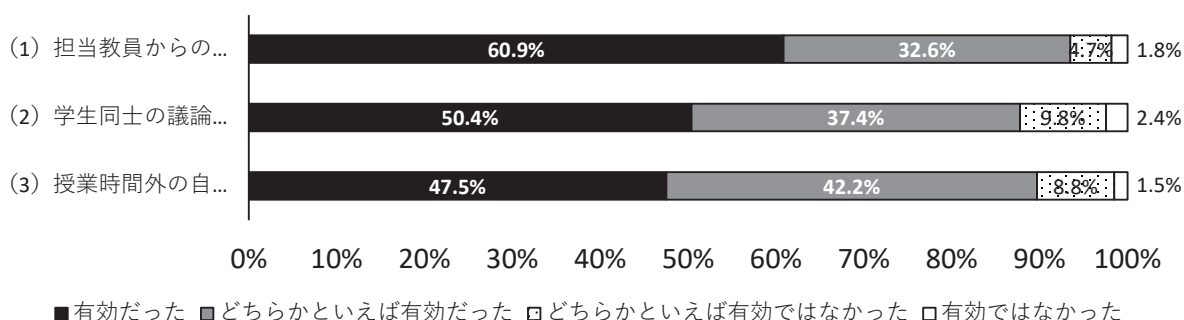


図2：指導・助言や学習行動の有効性<杉本+中百舌鳥>

表2：指導・助言や学習行動の有効性<キャンパスの差異検証>

設問	M		SD		t	p	Cohen's <i>d</i>	95%CI
	杉本	中百舌鳥	杉本	中百舌鳥				
(1) 担当教員からの...	3.49	3.56	0.711	0.620	-1.72	.086	-0.11	[-0.158, 0.011]
(2) 学生同士の議論...	3.33	3.38	0.790	0.717	-1.09	.276	-0.07	[-0.147, 0.042]
(3) 授業時間外の自...	3.32	3.40	0.746	0.654	-2.00	.046	-0.13	[-0.177, -0.001]

より大きい)、効果量は-0.13と小さい値であった。この結果から、設問(3)に関しては、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの間で統計的に有意差が認められるものの、その差は実質的にはそれほど大きなものではないと言える。

設問(1)～(3)の結果より、初年次ゼミナールの到達目標の達成に向けた指導・助言や学習行動の有効性については、一部で有意差が見られたものの、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスで実質的には大きな違いはないと言える。

3.3. 履修学生の学部・学域の多様性

「履修学生の学部・学域の多様性」の分析に使用した設問を以下に示す。

(2) 受講生の所属学部・学域の構成

選択肢：1. 所属学部・学域に大きな偏りはなかった、2. 所属学部・学域に大きな偏りがあり自分は多数派だった、3. 所属学部・学域に大きな偏りがあり自分は少数派だった

3.3.1. 全学的な観点からの検証

上記の設問における選択肢の分布を表3に示す。表3の通り、「大きな偏りはなかった」が53.9%であることから、初年次ゼミナールに多様な学部・学域の学生が参加することで、多くの学生にとって初年次ゼミナールが異なる価値観や多様性に接する機会になっていることを示唆している。

一方で、「大きな偏りがあり自分は多数派だった」と「大きな偏りがあり自分は少数派だった」が合計で46.1%であり、残りの約半数の学生にとっては、多様な学部・学域の学生との交流の機会が限られていた可能性がある。履修学生の学部・学域の多様性は初年次ゼミナールの特色のひとつであるため、今後も同様の回答傾向が見られるようであれば、大学として何らか

の対応が必要となる可能性がある。

3.3.2. キャンパスを区別した検証

上記の設問について、キャンパスによる違いを検証するため、5%水準でキャンパス(杉本・中百舌鳥)×選択肢(3つ)の χ^2 検定を行ったところ(杉本キャンパス518名、中百舌鳥キャンパス463名)、有意差は見られず、効果量も小さかった($\chi^2(2, N = 981) = 0.986, p = .611, V = .032$)。したがって、履修学生の学部・学域の多様性について、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの間で学生の認識に大きな違いはないと言える。

3.4. 施設や学修支援の有効活用

「施設や学修支援の有効活用」の分析に使用した設問(選択肢は複数回答可)を以下に示す。

5. 次の大学施設や学修支援のうち、初年次ゼミナールの受講に際して、有効に活用できたものをすべて選んでください。

選択肢：1. 大学図書館、2. ラーニング・コモンズ、3. 自習室・自習スペース、4. 学内の組織が提供している学習方法やレポートの書き方に関する教材(動画を含む)、5. 学内の組織が実施する学修相談や講習(オンラインを含む)、6. その他(), 7. 特になし

3.4.1. 全学的な観点からの検証

上記の設問における選択肢の分布を表4に示す。表4の通り、回答割合が最も高かったのは「大学図書館」(59.1%)であり、初年次ゼミナールでの学びに関して、大学図書館が有効に活用されていることが示唆される。初年次ゼミナールでは図書館と連携して、杉本図書館、中百舌鳥図書館の両館から「初年次ゼミナールでの図書館活用プログラム」(図書館ツアー、OPAC講習会、ガイダンス)の実施協力を受けており、活用を促す要因のひとつになっている可能性がある。初年次ゼミナ

表3：履修学生の学部・学域の多様性<杉本+中百舌鳥>

選択肢	回答数(人)	回答割合(%)
大きな偏りはなかった	529	53.9%
大きな偏りがあり自分は多数派だった	256	26.1%
大きな偏りがあり自分は少数派だった	196	20.0%

表4：施設や学修支援の有効活用<杉本+中百舌鳥>

選択肢	回答数 (人)	回答割合 (%)
大学図書館	580	59.1%
ラーニング・コモンズ	167	17.0%
自習室・自習スペース	236	24.1%
学内の組織が提供している学習方法や レポートの書き方に関する教材 (動画を含む)	167	17.0%
学内の組織が実施する学修相談や講習 (オンラインを含む)	17	1.7%
その他	16	1.6%
特になし	235	24.0%

ルの到達目標のひとつに「図書館、各種データベース等を活用して、必要な資料や情報を収集できる」が設定されていることもあり、大学図書館の有効活用は初年次ゼミナールの運営上、意図した状況になっていると言える。「特になし」の割合の高さ (24.0%) と「学内の組織が実施する学修相談や講習 (オンラインを含む)」の割合の低さ (1.7%) は今後の課題と言える。

3.4.2. キャンパスを区別した検証

上記の設問 (複数選択可) について、キャンパスによる差異を検証するため、「その他」を除き、選択肢ごとに5%水準でキャンパス (杉本・中百舌鳥) × 選択肢 (選択あり・なし) の χ^2 検定を行った (全ての選択肢において、 $\chi^2 (1, N = 981)$)。結果を以下の表5に示す。

「ラーニング・コモンズ」は有意差が見られ ($p < .001$)、弱い関連性が見られた ($V = 0.23$)。キャンパスごとの選択割合については、杉本キャンパスが8.9% (518名中、

46名)、中百舌鳥キャンパスが26.1% (463名中、121名) と中百舌鳥キャンパスの割合の方が高く、中百舌鳥キャンパスの履修学生の方が「ラーニング・コモンズ」を有効に活用していた可能性がある。「特になし」は有意差が見られたものの ($p < .05$)、関連性は非常に弱いと言える ($V = 0.06$)。

3.5. 「多様な視点への気づき」に関する要因

初年次ゼミナールの目的のひとつとして設定されている「多様な視点への気づき」について、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスを区別した上で、関係する要因を検証した。分析には、「多様な視点への気づき」に関する設問として設問2「(1) 他の受講生等の多様な視点を積極的に取り入れて、自身の学びや思索に生かすこと」を使用した。また、履修学生の多様性に関する設問として設問3「(2) 学生同士の議論や学びあい」と設問4「(2) 受講生の所属学部・学域の構成」を使用した。

表5：施設や学修支援の有効活用<キャンパスによる差異検証>

選択肢	χ^2	p	V
大学図書館	0.66	.417	0.03
ラーニング・コモンズ	50.31	.000	0.23
自習室・自習スペース	0.02	.895	0.00
学内の組織が提供している学習方法や レポートの書き方に関する教材 (動画を含む)	2.18	.140	0.05
学内の組織が実施する学修相談や講習 (オンラインを含む)	0.07	.798	0.01
特になし	4.04	.045	0.06

3.5.1. 学生同士の議論や学びあい

設問2(1)と設問3(2)の関連性について、スピアマンの順位相関係数 r_s を用いて検証した。その結果、杉本キャンパス($r_s=0.45$ 、 $p<.001$)、中百舌鳥キャンパス($r_s=0.47$ 、 $p<.001$)ともに中程度の正の相関が認められた。このことから、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスのどちらにおいても「多様な視点への気づき」と「学生同士の議論や学びあい」に関連性があることが示唆される。

3.5.2. 履修学生の学部・学域の多様性

設問2(1)と設問4(2)の関連性について、シャピロ・ウィルク検定を用いて、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスそれぞれで、設問4(2)の選択肢ごとに設問2(1)の回答が正規分布に従っていないことを確認した上で、クラスカル・ウォリス検定により検証を行った。その結果、両キャンパスで有意差は見られなかった(杉本キャンパス： $H(2, N=518)=0.315$ 、 $p=.854$ 、中百舌鳥キャンパス： $H(2, N=463)=1.883$ 、 $p=.390$)。このように、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスのどちらにおいても「多様な視点への気づき」と「履修学生の学部・学域の多様性」には関連性が確認されなかった。

4. 考察

本研究の目的の中心は、大学統合によって新しい体制となった初年次教育科目「初年次ゼミナール」について、設定されている目的と到達目標がどのような達成状況にあるかを検証することであった。結論として、それらの目的と到達目標の達成状況は、全学的な観点からもキャンパス別の観点からも良好であることが確認された。総合大学である大阪公立大学で学ぶ重要な意義のひとつは多様な視点の存在に気づくことである。大学生活の早い段階である1年次において、多くの学生がそのような気づきの経験をしているという今回の結果から、初年次ゼミナールは大阪公立大学の学生にとって意義のある学びの機会になっているとすることができる。

また、初年次ゼミナールで学ぶ学生がどのような学習環境にあったのかを検証した結果、到達目標の達成

に向けて、多くの学生は担当教員からの指導や助言、学生同士の議論や学びあい、授業時間外の自習をいずれも有効と考えていた。これら教員、他の履修学生、自習というそれぞれ異なる側面の学習により、受動的な学びから能動的な学びへの移行が促されている可能性がある。

初年次ゼミナールは重要な目的のひとつとして「多様な視点への気づき」を設定している。この目的の達成について、「学生同士の議論や学びあい」、「履修学生の学部・学域の多様性」それぞれとの関連性を検証した。その結果、学生同士の議論や学びあいとの関連性は示唆されたが、履修学生の学部・学域の多様性との明確な関連性は確認されなかった。幅広い学部・学域の学生による議論や学びあいが「多様な視点への気づき」に寄与していることは、総合大学である大阪公立大学において重要な知見であると言える。今後同様の傾向が見られるかについて把握が必要と思われる。一方で、履修学生の学部・学域の多様性が直接的な関連性を持たないことから、単純に学部・学域の多様性だけで気づきの経験が豊かになるわけではないことを示唆している。これらの結果を踏まえると、初年次ゼミナールの特色である履修学生の学部・学域の多様性が実現するよう大学として取り組みつつも、個々の授業において多様な学びの機会を提供し、自身とは異なる視点が存在することに気づくような学習環境を整えることが重要であると言える。

アンケート調査を実施する上での今後の課題として、履修学生の学部・学域の多様性について学生の認識を尋ねるだけでなく、実際の状況を把握することが挙げられる。今回の分析に使用した2022年度のアンケート調査では、回答した学生の学部・学域は尋ねていないため、回答データにおける履修学生の学部・学域についての実際の数は不明である。しかし、2023年度実施のアンケート調査では、回答した学生の学部・学域を尋ねる予定であるため、回答データ上での実際の状況を把握することが可能になる見込みである。その新たなデータを用いて、「履修学生の学部・学域の多様性」と「多様な視点への気づき」との関連性について改めて検証を行うことが望まれる。

引用文献

- 大阪市立大学大学教育研究センター（2004），『「全学共通教育での初年次教育報告書」1 回生セミナーでの実施結果を中心に』，大阪市立大学大学教育研究センター，7。
- 高橋哲也（2018），「大阪府立大学初年次ゼミナールの概要」，大阪大学「学問への扉」開設記念シンポジウム資料，5。
https://www.celas.osaka-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/12/gakumon-symposium_takahashi.pdf（最終アクセス：2023年9月5日）

注

1. 大阪公立大学の学士課程における基幹教育科目、

大学院課程における大学院共通教育科目の企画・運営に責任を持ち、大学全体の国際化の推進に向けた教育プログラムの企画・実施及び学修支援を行うことを目的とする。国際基幹教育機構が初年次教育科目「初年次ゼミナール」を開講している。

2. 筆者は開学の2022年度から同委員会の委員であり、本稿執筆の2023年度現在も委員を務めている。本稿は、本文中で言及している「より詳しい分析は紀要等での報告に委ねられた」に該当する分析結果である。

大阪公立大学 2022年度初年次ゼミナール 受講者アンケート

- このアンケートは、初年次ゼミナールの受講生の皆さんから、ゼミナールにおける学習経験や学習成果に関する評価や要望等を集めて、カリキュラムの改善を行っていくための基礎資料とすることを目的としています。
- 回答は無記名です。成績評価に影響を与えたり、回答者個人を特定できる形で公開されたりすることは一切ありません。
- 自由記述欄の回答内容につきましては、次年度の授業科目ガイドに「2022年度受講者からの声」として、掲載させていただく可能性があります。また、個人を特定できない形でホームページ等での広報に利用させていただく可能性があります。アンケートの趣旨をご理解の上、ご協力をお願いします。

1. どちらのキャンパスで開講された初年次ゼミナールを受講しましたか

中百舌鳥・杉本から1択

2. 初年次ゼミナールの受講を通じて、次の到達目標がどの程度できるようになったと思いますか。それぞれ当てはまる数値を1つ選んでください。

「4. できるようになった 3. ある程度できるようになった 2. あまりできるようにならなかった 1. できるようにならなかった」の4つから1択

- (1) 他の受講生等の多様な視点を積極的に取り入れて、自身の学びや思索に生かすこと
- (2) 知識や情報の収集を、必要に応じて図書館や各種データベース等を活用して、積極的に行うこと
- (3) 収集した知識・情報を活用して、論理的に考えること
- (4) 入手した情報やそれに関する自分の考えを表現・発表できること
- (5) 自分の考えを自分で再検討できること
- (6) 適切な形式でレポート作成、発表等ができること

3. 問2の6つの到達目標を学んでいく上で、次の点はどの程度有効でしたか。それぞれ当てはまる数値を1つ選んでください。

「4. 有効だった 3. どちらかといえば有効だった 2. どちらかといえば有効ではなかった 1. 有効ではなかった」の4つから1択

- (1) 担当教員からの指導や助言
- (2) 学生同士の議論や学びあい
- (3) 授業時間外の自習（レポートやプレゼンの作成、作成のための情報収集などを含む）

4. 受講したゼミナールに当てはまると思うものを、1つずつ選んでください。

- (1) 受講生の人数

「1. 10人未満 2. 10人以上15人未満 3. 15人以上20人未満 4. 20人以上」から1択

- (2) 受講生の所属学部・学域の構成

「1. 所属学部・学域に大きな偏りはなかった 2. 所属学部・学域に大きな偏りがあり自分は多数派だった 3. 所属学部・学域に大きな偏りがあり自分は少数派だった」から1択

5. 次の大学施設や学修支援のうち、初年次ゼミナールの受講に際して、有効に活用できたものをすべて選んでください。

1. 大学図書館
2. ラーニング・コモンズ
3. 自習室・自習スペース
4. 学内の組織が提供している学習方法やレポートの書き方に関する教材（動画を含む）
5. 学内の組織が実施する学修相談や講習（オンラインを含む）
6. その他（ ）
7. 特になし

6. 次年度、初年次ゼミナールを受講する新生に伝えたいこと（アドバイス等）があれば、記入して下さい。

7. 初年次ゼミナール受講の全体を通じて、感想や意見（特に良かった担当教員からの指導・助言や教員への要望を含む）があれば記入して下さい。